

箱庭療法によるアボリジニの子どもの世界

岡 田 康 伸

Worlds of Aboriginal Children through the Sandplay Therapy

OKADA YASUNOBU

I. はじめに

一連の本研究の目的は3つある。ひとつは、心理療法としての箱庭療法を充実させるために、箱庭療法の基礎的な資料収集の一環として、日本人以外の作品を収集することである。また、ふたつめは、箱庭療法の応用として人類学的な調査の手段として、箱庭療法が使用できるか否かを調べ、それをういていく基礎づけをすることである。また三つ目は、筆者は、これらの資料から、藤岡喜愛が主張した、「人格の進化」の考えに沿いながら、「人格とは何か」を考察することをめざしていることである。これらの大きな流れの中に本研究は位置づけられている。具体的にはこの一連の研究は、1986年の甲南大学学術研究所の援助によるオーストラリア調査に始まる。1986年には、オーストラリアのダーウィンで、中学生、高校生、大学生の箱庭の作品を収集した。この一部はすでに1988年に岡田ら¹³⁾によって、「オーストラリアにおける箱庭表現に関する研究」として報告されている。また、小学生については、1987年に調査を継続した。これについては、心理臨床学会、第9回大会で、1990年に、樋口啓司⁶⁾他、「オーストラリアにおける箱庭表現に関する研究」(7)―小学生の箱庭作品について―で発表されている。また、岡田¹⁴⁾が中学生、高校生、大学生などの作品の紹介とそこに働く宗教の影響をテーマに、「箱庭表現の諸相」として、1991年に、国立民族学博物館研究報告別冊15号のオーストラリア、アボリジニ：狩猟採集民の現在、の中で報告した。これらに基づき、1990年にオーストラリアの北部にある、先住民であるアボリジニの土地、アーネムランドの保護地区、マニングリダでのアボリジニの箱庭作品の調査研究へと^{注1)}発展していった。本報告は、その時の調査の一端を示すものである。

アーネムランドのマニングリダは図1に示す場所にある。ここは、保護地区で、許可なしではアボリジニ以外のものが入ることができない。実際、この調査の隊長であった小山修三氏



図1 アーネムランド、マニングリダの地図
(窪田 (1994 年) より引用)

から「この保護地区に入れないで、引返すことも覚悟しておいて下さい」と言われ、ダーウィンで待機していた。アボリジニの兄弟となっている小山氏でさえ、いつ許可が出てその地域に入ることが出来るのか明確でない。ましてやはじめての筆者に許可が出るか否かは不確かであった。それでも、「寝袋で、軒下で野宿も覚悟で」といわれ、その気になっていた。先発隊として折衝のために保護地区に入っていた小山氏から突然、「保護地区に家族ごとくる人はめったにないことなので、全員で来ていいということだ」と許可のおりた知らせがあった。ダーウィンに、たまたま筆者の家族がいたのだが、家族ごと「来てよい」という許可だという。先方も、調査員が来て、調査していく例は多いが、家族が来ることはめったにないことなので、逆に観察しようということらしい。しかも幸いにも、公務員のある人が休暇で保護地区の外に出るので、その間、その家が借りられることになった。このようにして、本調査は幸運にめぐまれながらおこなわれた。この時、マニングリダに入ったのは、従って筆者の他¹²²⁾5名であった。

少し詳しくいきさつを述べたがこれは調査が自然科学が要求するような厳密さを欠くことの弁解のためでもあり、また、そのような状況に臨機応変に対処しなければならないことを知ってほしかったためでもある。もちろん偏見と歪んだ資料を提出しているのでは問題にならないが、できるだけそういう弊害はさけるよう心がけて調査した。本調査が今後の調査によって、より厳密な資料を得る手がかりとなり、又その資料により修正されていく基となれば幸いという気持である。

II. 問 題

「はじめに」で述べたように、箱庭療法が文化人類学的な調査の方法として使用できるか否か、また、使用したいというのが問題意識であり、それを確かめるのが目的でもある。これは、すでに藤岡(1966)が文化人類学的調査に心理テスト(彼は原住民にロールシャッハテストとバウムテストを実施)を使用した時のそれまでの問題点と利点を総括したことからの再出発でもある。すなわち、単なる心理テストでは限界があるが、もう少し違う形のものが必要であり、ここでは、箱庭療法を調査の手段として使用しようとした。筆者は藤岡の考えを次のように要約したいと思う。「心理テストが不適切になってしまうのは早計である。もう一工夫すれば興味深い資料が得られよう。たしかに、ロールシャッハテストやバウムテストでは、欧米人の成長型に対しては、狩猟採集民は幼児型や異常型を示す。だからといって、彼らが、幼児的であるとか、病的であるとか決めつけられない。なぜなら、集団のリーダーとして集団をまとめ、判断し、リードしていく力を備えている人でも幼児型であるからである。このような心理テストで幼児型を示すのは彼らが住んでいる環境に適していくためには、このような心理テストで示されるような能力、精神状態は、幼児的でよいのであろう。そこでは、彼らには、もっと違う精神能力を必要とされ、それを備えているのである。」と。ここから、藤岡は「人格の進化」とイメージの大切さを導き出している。このような藤岡の考えもあり、彼の指導もあって、「はじめに」で述べたように、甲南大学での研究が始まったのである。では、心理学として、彼らの精神状態や能力をどのように考え、捕えていくかが次の課題となる。ここに、厳密な心理テストでない、遊びの要素を兼ね備えた箱庭療法を利用することが考えられた。狩猟採集民がどのような作品を制作するのが関心ごとに

なったのである。

また、彼らも、人間として社会生活を営むわけだから、現代人との共通面もあろう。特に、幼児や児童は、その共通面は色濃く出てくるかもしれない。なぜなら、成人になっていくことは、その文化を習得していくことであるから。原始的な、本能的なものは、共通したものであろうから、それらがどの年令で分化し、変化していくのであろうか興味深いところである。

一方、箱庭療法は、ユング分析心理学を背景とした、心理療法の一技法である。ユング心理学の理論とこのような文化人類学的調査と関係する概念は、やはり、普遍的無意識（集団的無意識と訳す人もいる）である。ユングは、個人分析を通じて、個人無意識のみならず、人間に共通する無意識を感じ、普遍的無意識の存在を主張した。普遍的無意識は人間だけでなく、動物や生き物すべてのものがもつと考えていった。（生物全体の普遍的無意識の実感はないが、筆者も心理療法の体験と教育分析により、無意識の中に、個人を超えた無意識の存在は実感できるようになってきている。）原住民と現代人とを比較する時、この普遍的無意識の存在は、両者の共通のものとして、どこかに（ここでは、箱庭の作品のどこかに）投影されて、出現してくることが期待される。その共通性と相違性を探ぐることは、少々飛躍するが、藤岡が示した人格の進化のみならず、人格形成を考えるために役立つであろう。

ところで、筆者は、治療場面で心理療法の一技法として、箱庭療法を利用している。それをさらに心理療法家の養成や訓練などの応用へと拡大して、利用している。そこに働いている考えは、イメージの重視である。イメージの訓練への利用は、心理療法家はイメージを扱わなければならないと考えているからである。また、イメージと治療との関係は単純に言えば、心理的な問題が起きた時には、無意識にあるものがイメージとして、意識化されることによってその問題が解消されていくといえる。これに働く要因はさまざまであり、ここで詳しく述べることはできないが。視点を変えれば、イメージの働きに治癒力があるともいえる。また、どのような人たちであれ、イメージを持っている。イメージこそ人の日常の生活の中で、実際に心の中で働いている。表出した行動はイメージに基づいたものであるとさえいえる。原住民もイメージはあろう。むしろ、原住民はアニミズム的であり、イメージの世界に近いともいえる。イメージを重視していくならば、心理テストも文化人類学的調査の手段となり得よう。箱庭療法はイメージを重視したものとして、このような手段となり得るのではないかと考える。だが、イメージを中心に考えると、例えば絵であれ、箱庭の作品であれ、それを分析し、意味づける基準はあいまいな面を残す。イメージを考える時、このあいまいな面こそ大事であるから、調査の手段となり得るのであるという主張と矛盾してしまう。今回の試みはあいまいな面を少しでも少なくしていこうとするための資料の収集であり、分析の基準の構築のための調査のひとつである。しかし、イメージのもつよい面のあいまいさは残していかなければならない。

Ⅲ. 目 的

一連の研究の中で、今回は、アボリジニの子どもたちの箱庭の作品を収集し、報告することとを目的とする。また、同じマニングリダ学校⁽¹³⁾に通っているアボリジニ以外の子（ここでは白人の子又は白人と呼ぶ。実際は厳密な意味の白人でないかもしれないが、保護地区を支える純粋な

アボリジニ以外の人の子という意味である。)の箱庭の作品を参考のために示す。また、アウトステーション^(註4)の箱庭の作品も参考までに示した。これは、方法でも述べるが、筆者が残っていた箱庭セットで、マリー・ガード^(註5)が収集したものである。

IV. 方 法

1. 制作者：制作者は、アーネムランド、マニングリダのマニングリダ校に通っている児童たちである。その男女別、年齢別などは表1に示した通りである。同じ学校に通っている白人の子も参考までに収集した。また、マレー・ガードがアウトステーションで収集した制作者の一覧を2表に示してある。今回はアウトステーションの中に大人が一人おり、大人は除くつもりであったが、貴重な資料であるので、あえて子どもでない人の作品も紹介しておきたい。

2. 制作場所：マニングリダ校の資料室を借りた。はじめは、砂箱1つでするつもりであったが、希望者が多かったので、砂箱を2つ使い、玩具は共通とした。その時の玩具の一部が、写真1で示してある。なお、図2はその時の見取図である。

3. 記録：岡田(1984)がすでに使用している記録用紙を2枚用意した。1枚は初発時間や所要時間などを記入するものであり、2枚目は箱を9等分したもので、玩具の位置などが記入できるものである。制作者が制作中に、立合人が適宜記入し、制作後、記入もれないように気をつけた。

4. 立合人：砂箱が1個の時は立合人は筆者のみの予定であったが、砂箱が2個になったので、Ko, Ku, Oの3人が立合人を務めた。Ko, Ku, Oに対しては、あらかじめ筆者が注意すべき点、

表1 制作者の人数

年齢 \ 性別	アボリジニ			白 人			合計
	男	女	計	男	女	計	
5～7才	5	3	8	2	2	4	12
8～9才	7	4	11	2	1	3	14
10～11才	9	11	20	3	0	3	23
12才以上	10	6	16	0	1	1	17
計	31	24	55	7	4	11	66

表2 アウトステーションの制作者

年齢 \ 性別	男	女	計
4才まで	2	1	3
5～7才	2	1	3
8～9才	1	0	1
10～11才	2	3	5
12才以上	5	2	7
計	12	7	19

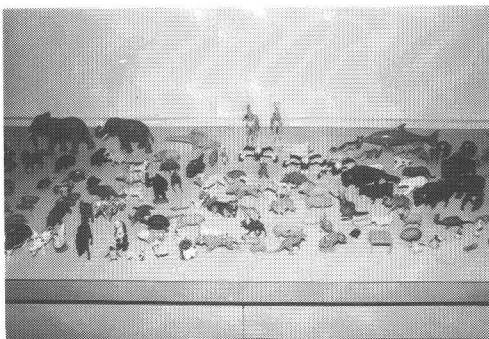


写真1 マニングリダ校で使用した玩具の一部

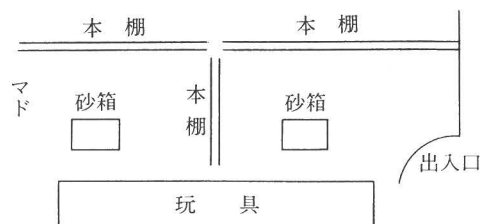


図2 セッティングの見取り図

記録の方法などを教示しておいた。誰もいないよりは、たとえ素人であるが誰かが居る方がよりよいと判断したからである。

5. 制作の時間：午前8時過から午後3時頃までが原則であった。筆者は、学校が始まる前、朝の体操に参加し、下準備を8時ぐらいから始めていた。

6. 実施日：1990年8月8日から1990年8月20日までの間であった。学校の行事の時や、土・日曜日は調査は実施していない。

7. 箱庭道具：箱庭のセットは日本より持込んだ。すでに日本より持ち込まれていた箱庭セットも使ったので、今回新たに持ち込んだのは一セットのみであった。日本や他のオーストラリアで使ったものと、できるだけ同じようにした。アボリジニのための玩具として意識したものはない。調査後、井戸が多く使われているのに気づき、意識的でなかったが興味深いものが入っていたと思った。

8. アウトステーションの資料収集：マレー・ガードによるもので詳しいことはわからない。依頼した時、最低限、写真での記録と制作者の年令と性別の区別を記録するように依頼しておいた。

V. 結果と考察

1. マニングリダ校の作品

A. 調査への反応と振舞い

方法で述べた設定のもと、各年令群のクラスに、立合人が制作者を求めにいく。担任が希望者を募る時、低学年程、我先にと手をあげる。箱庭室へ2人で歩いていく時、言葉は通じないが、できるだけリラックスできるようにした。手をさしのべてくる子もいたが、まれであり、恥しそうにすることが多い。教室で元気よく手をあげたのと違う面をみせていた。特に女の子は、少し後からついてくる感じで、いかにも内向的であった。白い歯をみせて、笑っている感じで、緊張で固くなっているという程ではない。あいそ笑いといえるのかもしれない。

箱庭室では、玩具をみると目を輝やかせ、玩具に近づき、少しもじもじと、おそろおそろ玩具をもつ。調査方法としては、2つ並べざるを得ないマイナス的なセッティングではあった。作品は衝立てで見えないにしてあっても、もう一人仲間がいることは、(同時に終わっている時は、同時に2人を案内してきていた。)安心するようであった。しかし、男子と女子が2人になると、何んとなきこちない雰囲気が生じた。この感じは、年令が上の程強く感じられた。男女共学の学校生活ではあるが、異性に対しての意識は家庭での男女の役割や待遇が我々の生活以上にはっきりしていることが反映されるのかもしれない。このような様子や箱庭室での彼らの振舞いは、アウトステーションなどアボリジニの村に入って観察するものと似ているとKo教授は言う。「凝縮されたものが観察できるなあ」と印象を述べていたのが印象的であった。

作り始めや制作し終った時の印象は、日本やオーストラリアで作品収集をした時と異なることはなかった。すなわち、何か決心したようにひとつの玩具をおくし、何かほっとしたように、立合人の方をみて「終り」の合図をしていた。

B. 数量的分析

(1) 初発時間と所要時間

マニングリダ校のアボリジニと白人の初発時間と所要時間を示したのが表3である。白人の人数が少ないが、参考のためにのせておいた。なお、比較のために、日本人とオーストラリアのダーウィンの幼稚園、小学校の子どもたちの初発時間と所要時間を示したのが、表4である。

表3より、アボリジニの5-7才群は、男女ともに初発時間は2分半もかかりおそい。日本人らの約3倍以上かかっている。取り組みの遅さや、筆者ら外国人への抵抗などが考えられるかもしれない。しかし、制作を依頼に教室へ行くと、すでに述べたようにどの年令も「ハイハイ」と自分から手をあげて、競うように、制作に来てくれていた。むしろ、年令がいく程手をあげる人数が少なくなっていた感じがあった。初発時間のおそさの意味は、我々への抵抗は余り考えない方がいいかもしれない。

多少ばらつきはあるが、5-7才群以外は、日本人らと同じぐらいの初発時間である。ただ、8-9才群の女子が1分かかっており、少し遅い。この群の女子は4名しかおらず、たまたまの結果なのかもしれない。

表3 アボリジニの初発時間と所要時間

		初 発 時 間				所 要 時 間			
		ア ボ リ ジ ニ		白 人		ア ボ リ ジ ニ		白 人	
		平均	レンジ	平均	レンジ	平均	レンジ	平均	レンジ
5～7才	M	2' 32"	10"-6'	5"	5"	29' 47"	10' - 39' 10"	16' 35"	7' 55"-25' 15"
	F	2' 20"	20"-6' 20"	54"	3"-1' 45"	32' 55"	23' 45"-39'	35' 30"	8' - 63'
	全体	2' 28"	10"-6' 20"	30"	5"-1' 45"	30' 58"	10" - 39' 10"	25' 08"	7' 55"-63'
8～9才	M	44"	3"-2' 50"	25"	10"- 40"	23' 26"	5' 23"- 46'	14' 02"	10' 03"-18'
	F	1' 02"	5"-3' 10"	1' 50"	1' 50"	22' 23"	19' - 30' 15"	24' 30"	24' 30"
	全体	51"	3"-3' 10"	53"	10"-1' 50"	23' 02"	5' 25"- 46'	17' 31"	10' 03"- 24' 30"
10～11才	M	37"	3"-2' 20"	15"	5"- 30"	16' 58"	5' 20"-28' 10"	18' 43"	2' 30"-27' 40"
	F	22"	3"-1' 25"	—	—	21' 27"	1' 45"-60'	—	—
	全体	29"	3"-2' 20"	15"	5"- 30"	19' 26"	1' 45"-60'	18' 43"	2' 30"-27' 40"
12才以上	M	13' 9"	5"- 45"	—	—	25' 15"	14' - 32'	—	—
	F	34"	5"-1' 30"	30"	30"	19' 56"	14' - 32'	19'	19'
	全体	23"	5"-1' 30"	30"	30"	23' 16"	14' - 32'	19'	19'

表4 オーストラリア、日本人の初発時間と所要時間

		初 発 時 間				所 要 時 間			
		日 本		その他の オーストラリア人		日 本		その他の オーストラリア人	
		平均	レンジ	平均	レンジ	平均	レンジ	平均	レンジ
5～7才	M	36"	3"-3' 35"	40"	1"-205"	20' 14"	7' 54"-33' 55"	29' 06"	11' 03"- 56' 03"
	F	67"	3"-4' 30"	32"	0 - 154"	17' 29"	5' 41"-28' 37"	37' 24"	7' 08"- 69' 07"
	全体	49"	3"-4' 30"	36"	0 - 205"	18' 53"	5' 41"-33' 55"	34' 18"	7' 08"- 69' 07"
8～9才	M	44"	1"-2' 50"	24' 04"	0 - 150"	16' 42"	3' 55"-30' 10"	23' 24"	1' 09"-100' 09"
	F	38"	3"-1' 50"	12' 05"	0 - 45"	21' 30"	8' 57"-44' 20"	23' 42"	4' 04"- 76' 08"
	全体	42"	1"-2' 50"	20' 01"	0 - 150"	18' 42"	3' 55"-44' 20"	23' 30"	4' 04"-100' 09"
10～11才	M	35"	5"-2' 30"	24' 09"	0 - 150"	11' 24"	2' 25"-34' 45"	13' 30"	3' 00"- 41' 00"
	F	32"	4"-1' 25"	25' 05"	0 - 55"	12' 48"	2' 50"-35' 40"	14' 18"	1' 07"- 49' 08"
	全体	34"	4"-2' 30"	25' 02"	0 - 150"	12' 00"	2' 25"-35' 40"	13' 54"	1' 07"- 49' 08"
12才以上	M	33"	1"-2' 30"	42' 05"	—	14' 27"	2' 00 - 37' 22"	21' 36"	—
	F	47"	7"-2' 30"	46"	—	19' 18"	6' 26"-33' 31"	22' 00"	—
	全体	39"	1"-2' 30"	44' 01"	—	16' 36"	2' 00 - 37' 22"	21' 48"	—

表3と表4の白人の比較では、保護地区の白人が余りにも被験者数が少ないので、比較できるものではないが、8-9才女子が2分近くかかっているのがめだつ。これは1名のみであり、この子の特徴なのだろうが。

所要時間は5-7才群が30分程であり、他の群は20分前後である。10-11才群の男子が17分とやや少ないのがめだつ。第4表で他地域と比べてみると、日本がどの群も所要時間が少ない。アボリジニとオーストラリアとは、比較的似ているが、10-11才群でアボリジニは男女ともオーストラリアよりも7分程度多い。

なお、アボリジニの中で2回作品を作った子が男子11名、女子8名いた。人数も少なく群分けは出来ないが、男女別で1回目と2回目の初発時間と所要時間を示したのが表5である。

表5 アボリジニの男女別による1回目と2回目の初発時間と所要時間

	初 発 時 間			所 要 時 間		
	男	女	計	男	女	計
1回目	50" (31名)	46" (24名)	48" (55名)	23' 10"	22' 40"	22' 57"
2回目	28" (11名)	26" (8名)	27" (19名)	24' 24"	21' 19"	23' 06"

表5によると、初発時間は、1回目では48秒かかっていたのが、2回目では27秒と減じている。これは、2回目は慣れたために、反応が早くなったとも考えられる。もっとも、2回目も作りたくなる子は、1回目でも早く作り始めていたかかもしれず、この点は確かめてはいない。なお、所要時間は余り変わらず、同じように23分程で制作していることがわかる。

(2) 使用玩具数

使用された玩具についての数量的分析を試みた。すでに岡田によって分類されたように玩具を5種類に分け、その頻度と総数とを示したのが表6である。参考のためその他の地域として、日本人とオーストラリア人との資料を示したのが表7である。

表6より、5-7才群で89.5個と多く、8-9才群で55.6個と少なくなり、10-11才群から又増え出す。男女差を比べると、女子の5-7才群が103.3個で男子の1.3倍であり、8-9才群では女子が76個で、男子の1.7倍と差が広がる。これは、この群の女子が4名しかいないために個人差

表6 アボリジニが使用した玩具数

	人 間	動 物	植 物	建造物	乗り物	種 類	総 数	高 さ
	個	個	個	個	個	個	個	cm
5～7歳	男	9.2	35	4.4	12.2	20.4	3.8	81.2
	女	38	7	26.3	27.3	4.7	4.3	103.3
	計	20	24.5	12.6	17.9	14.5	4	89.5
8～9歳	男	10.3	11.4	8.6	11.1	2.7	3.1	44.1
	女	23.8	6.8	14.5	27.5	3.5	5	76
	計	15.1	9.7	10.7	17.1	3	3.8	55.6
10～11歳	男	22.9	8.3	14.9	7.4	4.9	3.7	58.4
	女	24.4	8.9	14.8	17.1	0.9	3.7	66.1
	計	23.7	8.7	14.9	12.8	2.7	3.7	62.7
12歳以上	男	30.7	15.7	18.9	6.4	3.1	4	74.8
	女	16.8	3.7	18.5	11.5	1.2	4.2	51.7
	計	25.5	11.2	18.8	8.3	2.4	4.1	66.1
男 性	20.4	15.7	13.1	8.7	6.3	3.7	64.2	20.9
女 性	24.1	7	17.1	18.7	1.9	4.1	68.8	19.0

表 7 その他の地域での玩具の使用数

日 本 人									
	人 間	動 物	植 物	建造物	乗り物	種 類	総 数	高 さ	
5～7 歳	個	個	個	個	個		個		
	男	4.2	16.7	1.7	7.1	21.2	50.8		
	女	5.3	8.1	3.0	8.4	2.9	27.7		
8～9 歳	男	10.7	4.4	2.2	6.4	11.9	35.5		
	女	11.4	5.8	7.1	10.3	1.5	36.1		
	計	11.0	4.9	4.2	8.0	7.6	35.8		
10～11 歳	男	6.8	8.5	5.5	1.8	2.7	25.3		
	女	3.5	3.0	5.2	7.2	0.5	19.5		
	計	5.5	6.2	5.4	4.1	1.8	22.9		
12 歳以上	男	3.4	16.1	11.8	8.4	2.5	42.3		
	女	1.8	3.5	9.6	12.4	1.4	28.7		
	計	2.7	10.6	10.9	10.1	2.0	36.3		
そ の の オーストラリア人									
	人 間	動 物	植 物	建造物	乗り物	種 類	総 数	高 さ	
5～7 歳	個	個	個	個	個		個		
	男	3.7	9.4	3.8	17.4	5.6	39.8		
	女	9.6	14.6	11.0	30.6	1.4	67.0		
8～9 歳	男	7.2	12.6	8.1	25.3	3.1	56.1		
	女	9.9	11.9	7.8	9.7	3.7	42.8		
	計	7.3	16.2	6.9	13.6	0.7	44.7		
10～11 歳	男	8.9	13.5	7.5	11.2	2.6	43.5		
	女	13.8	6.3	13.6	9.7	3.5	46.9		
	計	1.6	12.1	8.3	12.0	0.6	34.6		
12 歳以上	男	7.7	9.2	11.0	10.9	2.0	40.8		
	女	6.9	12.5	16.5	12.8	3.6	52.0		
	計	6.5	12.7	19.7	13.8	0.9	53.0		
	男	6.8	12.7	18.1	13.4	2.5	52.4		
	女								
	計								

が大きかったためかもしれない。10～11 才群では男女の使用数比は 1.1 と同じぐらいになり、12 才以上で、男子 74.8 個で女子が 51.7 個と男子が女子の 1.4 倍と逆転して、多くなる。表 7 を参考にし他地域と比較すると、日本では、一貫して男子が多く使用している。ただし、8～9 才で女子が少し多くなるが、男女比は 0.98 ではば同数といえる。オーストラリアでは、10～11 才で男子が玩具使用が多くなる。ただし、12 才以上では再び女子が少し多くなるが、男女比は 0.98 ではば同数といえる。玩具数の男女差の変化が年令で異なるのは、何か興味深い。男女の強さや活発さと関係づけられるかもしれない。

なお、どの種類がどの程度各群で使用されるかを調べるために、表 8 を作成した。表 8 は使用された玩具の種類の割合を示している。

表 8 より、5～7 才群では、男子が動物 (43.1%) と乗り物 (25.1%) を多く使用して

表 8 各群の玩具の種類の割合

玩具の種類		人 間	動 物	植 物	建造物	乗り物
群		%	%	%	%	%
5～7 才	男子	11.3	43.1	5.4	15.0	25.1
	女子	36.8	6.8	25.5	26.4	4.5
	計	22.3	27.4	14.1	20.0	16.2
8～9 才	男子	23.4	25.9	19.5	25.2	6.1
	女子	31.3	8.7	19.1	36.2	4.6
	計	27.2	17.4	19.2	30.8	5.4
10～11 才	男子	39.2	14.2	25.5	12.7	8.4
	女子	36.9	13.5	22.4	25.9	1.4
	計	37.8	13.9	23.8	20.4	4.3
12 才以上	男子	41.0	21.0	25.3	8.6	4.1
	女子	32.5	7.2	35.8	22.2	2.3
	計	38.6	16.9	28.4	12.6	3.6
男 子		31.8	24.5	20.4	13.6	9.8
女 子		35.0	10.2	24.9	27.2	2.8

いる。女子では、人間（36.8%）が多く、動物（6.8%）が少なく、乗り物（4.5%）が非常に少ない玩具使用である。

8-9才群では、男子では5-7才群に比べ、動物（25.9%）と乗り物（6.1%）が少なくなり、その分他の玩具の使用が増えている。女子では、植物（19.1%）が減り、建造物（36.2%）の使用が増えた。

10-11才群では、男子は人間（39.2%）と植物（25.5%）が増え、動物（14.2%）と建造物（12.7%）が減っている。女子では建造物（25.9%）がやや減っているが、8-9才群と似た玩具使用率である。

12才以上群では、男子で動物（41.0%）が増えるが、ほぼ10-11才群と似ている。女子では植物（35.8%）が増えるが、10-11才群と似る。概して、玩具の使用率からだけでは10-11才群と12才以上群は似てきている。

また、人間類は、アボリジニが多く使用しており、他地域よりも非常に多い。アボリジニでは年がいく程多く使用されている。

動物は5-7才群の男子が多いが、他群では半減された使用となる。女子ではどの群でも少ない。日本ではアボリジニと群間では同じ傾向がみられる。オーストラリアでは、総数ではアボリジニと似て多い。特にオーストラリアの女子の動物の使用が多いのがめだつ。

植物は年齢がいく程増えているが、5-7才群の女子は例外としてこの傾向は日本やオーストラリアにもみられるものであった。

建造物は女子が多く使い、乗り物は5-7才の男子が多いが、他群では10%以下であった。

男子と女子を平均的にみると、動物（24.5%と10.2%）と建造物（13.6%と27.2%）と乗り物（9.8%と2.8%）の使用に違いがみられた。

表6にある高さについて一言触れておきたい。各群とも18cm以上であり、高く、立体的に作られていることがうかがえる。日本の大人で20cmぐらいであったのと似ている。（岡田 1984）また、アボリジニの5-7才群も18.4cmであるが、日本では、（年齢が5-6才で厳密に群同志が対応しないが、）15.1cmであったので、少しアボリジニの方が高いといえる。

C. 作品の提示

Bで述べた数量的な分析と対応させながら、4つの群の作品を提示していきたい。

〔5-7才群〕

初発時間の早い作品は男子では、写真2である。写真2は、10秒で作り始め、24分50秒かかった5才男子の作品である。玩具総数は150個で、動物を132個も使い、乗り物18個で、玩具の種類は2種類であった。動物と乗り物が乱雑に置かれており、混雑a型といえる。

ここで、作品の整理として、主として印象によるが、5つの型に分けたことをことわってお



写真2 5才男子の作品

く。分類基準を示したのが、表9である。この分類は主観的ではあるが、結果や考察を述べる時にわかりやすいので、あえてこのような形をとった。この分類自体については問題が残っているが、後日検証していきたい。

初発時間の早い女子の作品は写真3である。写真3は、6才女子の作品で、初発時間は20秒、所要時間は23分45秒で、玩具総数は、101個で、建造物が42個と多かった。5種類の玩具を使っており、混雑bよりまとまってはいるが、移行中ぐらいの感じであろう。混雑b型としておく。本人は町とテーマづけている。

初発時間の長いのは、男子では写真4で、これは7才男子の作品である。初発時間は6分かかっており、所要時間は39分10秒で平均より10分程長かった。玩具総数は55個で、人間類が27個と多いが、5種類の玩具を使いこなしている。町とテーマがつけることができそうな作品で

表9 整理のための分類型

型	特 徴	例 (写真番号)
混雑a型	箱の中に玩具が一見何んの意図もなく置かれているもの、未整理	2
混雑b型	混雑に置かれているが、まとまりの部分もみられるもの、一部整理されている	3, 8
羅 列 的	羅列的に置かれているもの、混雑より玩具は少なくなることが多い	6, 16
作品a型	まとまった作品ともいえるが異質なものが目立って、まとまりを壊しているもの	4, 10, 14
作品b型	まとまった作品で、テーマが考えられるもの	5, 9, 22



写真3 6才女子の作品



写真4 7才男子の作品



写真5 6才女子の作品

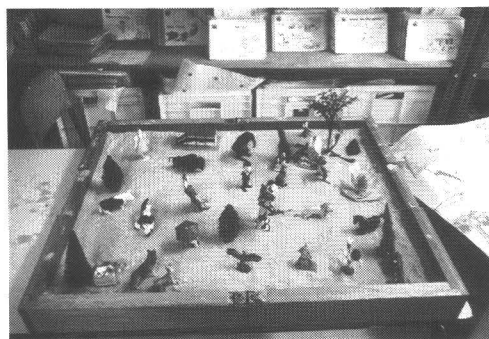


写真6 7才男子の作品

まとまったものといえる。作品 a 型と分類した。

女子の初発時間の長いものは、写真 5 である。写真 5 は、6 才女子の作品で、初発時間は 6 分 20 秒かかり、所要時間 39 分の作品である。玩具総数は 117 個で多く、人間、植物類が多く使われ、4 種類の使用であった。花が咲きみだれた森の中に人々がいる感じで、はなやかな作品で、一応まとまったものと考えられよう。本人は町と名づけていた。作品 b 型と考える。

写真 6 は、7 才男子の作品で、初発時間が 6 分で、所要時間が 38 分 55 秒であったものである。玩具総数は 33 個で少なく、使用玩具が少ない例として示した。乗り物類は使われておらず、4 種類の使用であった。町ともいえるが、人とライオンなどの動物が区別なくおり、羅列的なものと思われる。

〔8-9 才群〕

初発時間が短い男子の作品が写真 7 である。これは 9 才男子の作品で、初発時間が 3 秒と短かく、23 分の所要時間で平均的である。玩具使用総数は 55 個で平均よりやや多い作品である。ベッドや家具が町の中に入っており、混雑 b 型に属すると思われる。

女子で初発時間が短いのは写真 8 である。これは、8 才女子の作品で、初発時間は、5 秒で所要時間は 19 分であった。使用した玩具は 105 個で多く、人間類と建物が多く使用されていた。右上はベッドと井戸で家を作っているようでまともにはあるが、境を区切る柵などがない。道に楽器があるなどして、まとも切っていない。混雑 b 型といえよう。本人は町と題名をつけていた。

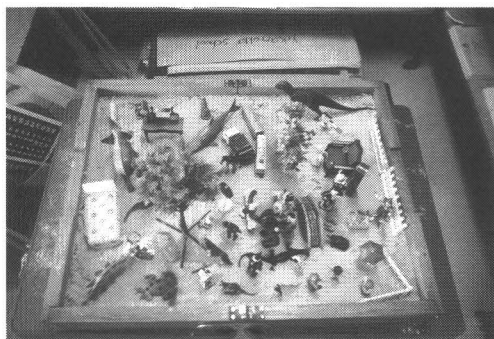


写真 7 9 才男子の作品

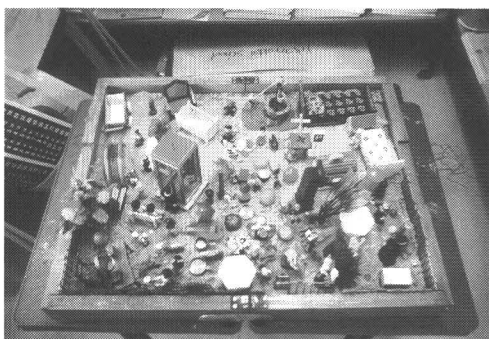


写真 8 8 才女子の作品



写真 9 9 才男子の作品



写真 10 9 才女子の作品

初発時間が長い男子の作品は写真9である。これは9才男子の作品で、この初発時間が2分50秒で、所要時間は45分と平均の倍をかけて作られている。使用玩具数は55個で、平均よりやや多いぐらいであり、植物の使用が多いのがめだつ。農家とテーマづけられそうな、まとまった作品である。日本などの9才児の作品と類似しているといえる。作品b型といえる。

女子で、初発時間が長いのは、3分10秒で写真10である。これは9才女子の作品で、所要時間は、19分40秒と短かく、使用玩具数も57個で一番少ない。森の中に這うヘビや恐竜がいる。テーブルや台所セットなどが区切られずにあり、境界が明確でないが、一応まとまった作品と考え、作品a型と考える。本人はオープンシーンと名付けた。

この群の男子で玩具数の多い作品と少ない作品を示したのが写真11と12である。写真11は8才男子の作品で、初発時間は1分10秒で46分間かかって制作した。使用玩具数は106個で多い。5種類の玩具を使用し、雲のための綿を多く使っている。村とテーマづけることができ、2つの領域にも分かれており、まとまった作品といえる。(作品b型) 箱の縁にワシが置かれており、箱の中におさまり切らないものがうかがえる。玩具数の少ないのが写真12で8才男子の作品である。初発時間は15秒で、所要時間は5分25秒と短かった。人間類が多く使用され、乗り物類や建造物類は使わず、3種類の使用であった。森の中で、ドクロ仮面を人間や動物が囲んで、戦おうとしている感じであり、まとまった作品といえる。やや羅列的であるが、戦いのテーマがうかがえるので作品b型とする。アボリジニの作品は戦いが少なかったが、これはまれな例のひ



写真11 8才男子の作品



写真12 8才男子の作品



写真13 写真12の2回目の作品



写真14 11才男子の作品

とつである。本人はテレビのシーンとテーマづけていった。なお、参考までに、彼の2回目の作品を示したのが写真13である。これは、初発時間が8秒で所要時間は10分10秒であり、玩具使用数は33個である。兵士と動物との戦いを示すのか、テーマは戦いである。1回目と、数量的な値は似たものでテーマも戦いであった。

〔10-11才群〕

男子の初発時間の短いのは写真14である。写真14は11才男子の作品で、この初発時間は3秒で、所要時間は15分35秒であった。使用玩具数は48個で平均より少ない。人間類を多く使い、乗り物類は使っていない。井戸を中心にした町のようなものである。大仏がめだったりして、まとまり切っていない。これは、作品a型といえよう。本人はマントルと名づけた。

女子の初発時間の短いのが、写真15である。写真15は10才女子の作品で、初発時間は3秒、所要時間は17分25秒であった。玩具は53個を使い、平均よりやや少ない。お墓や井戸やトラックなどが入りまじっているが、整理されつつある感じなので、作品a型に属すると思われる。本人はこれをアウトステーションと名づけた。このような作品、すなわち、整理はされてくるが、了解不能のような玩具が残っているのが、アボリジニの作品には多い印象をもった。

初発時間が長い作品は、男子では写真16である。写真16は10才男子の作品で、初発時間は2分20秒であり、所要時間は25分で、この群の男子では2番に長かった。使用玩具は137個で、人間類が129個と多く、3種類の使用であった。人間が通りにいる感じはするが、まとまりは感



写真15 10才女子の作品



写真16 10才男子の作品

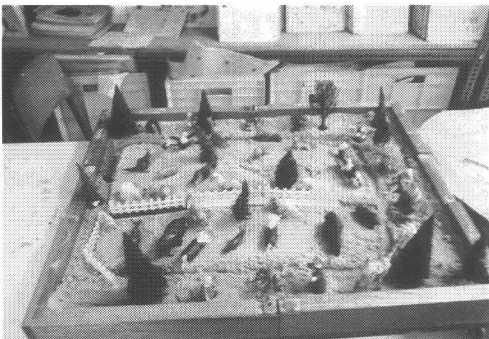


写真17 11才女子の作品



写真18 11才女子の作品

じられず、羅列的な作品といえる。女子では、写真 17 である。これは 11 才女子の作品で、この初発時間は 1 分 25 秒で、所要時間は 15 分 25 秒であった。使用玩具数は 59 個で、平均よりやや少ない。乗り物類は使用していないが 4 種類の使用であった。牧場のようであり、柵も使用し、砂を掘っており、よくまとまった作品で、作品 b 型といえる。

所要時間が長かった作品は写真 18 で示した。これは 11 才女子の作品でありこの写真 18 は初発時間 5 秒であり、所要時間 60 分かかり、131 個の玩具を使用した。柵で部屋や庭などを区別しており、よく分けられた作品だと思う。作品 b 型である。鏡や花などの玩具の使用などは女の子らしさを示していよう。

玩具使用が最も少なかったのが写真 19 である。写真 19 は 10 才男子の作品で、初発時間は 16 秒で、所要時間は 12 分であった。玩具使用数は 25 個で、平均の半分以下であった。これは中央の花束へ四方八方から人とヘビが集まってくるようであり、マンダラ作品といえる。作品 b 型に入れることができよう。なお、10 才女子の一名が、玩具を置かず、砂の上に木か草かの絵を書いただけであった。

〔12 才以上群〕

初発時間の早いのは、男子では写真 20 である。写真 20 は、14 才男子の作品で、初発時間は 5 秒であり、所要時間が 26 分で平均であった。使用玩具数は 128 個で多かった。人間類を 109 個も使い、建造物、乗り物類を使用していなかった。人が森の中にあふれている感じであるが、人々はまとまっている。右下の花やそれなりのまとまりを認めて、作品 b 型と考えたい。本人は町といていた。女子では、写真 21 が初発時間が短かく、5 秒であった。写真 21 は、12 才女子の作品で、所要時間は 18 分で、平均よりやや短い。使用玩具総数は 65 個で、平均よりやや多い。これは花が咲いた公園に人々が集まっている感じであり、作品 b 型に入れたい。

初発時間の長い男子の作品は写真 22 である。これは、14 才男子の作品で、この初発時間が 45



写真 19 10 才男子の作品



写真 20 14 才男子の作品



写真 21 12 才女子の作品

秒であり、所要時間は 25 分 30 秒で平均であった。使用玩具は 45 個で平均より少ない。川が右側にあり、川のある村と題名がつけられそうな作品である。本人は農場とテーマづけていた。アボリジニの作品では川が作られることはほとんどみられなかったからこれはめずらしい作品といえる。動物が 17 個とやや多いが 5 種類をまんべんなく使っており、いいバランスのとれた、まとまった作品といえよう。作品 b 型と考える。女子の初発時間の長い作品は、写真 23 である。写真 23 は、14 才女子の作品で、この初発時間は 1 分 30 秒であり、所数時間は 19 分 30 秒で平均である。使用玩具数は 52 個で平均である。テーブルと椅子が少しそぐわないが、農村の感じが出ており、余り使われない柵も使ってまとまった感じがある。作品 b 型に属するといえる。このように、12 才以上になると、まとまった作品になっていることがわかる。

主観的ではあるが、作品を 5 分類して、類型を試みた。これは、作品を概観した時、混雑 b 型と作品 a 型を作った方がいいと感じたからである。このこと自体がアボリジニの作品の特徴を示しているともいえる。すなわち、混雑した作品の中に、少し整理されかかっているものを感じられるので、単に混雑としてしまえないので、混雑 b 型を、また、まとまった作品ではあるが、我々には突飛としか思えない玩具の侵入がある作品をみて、作品 a 型を作ったことである。

分類と群別とを組合せたのが表 10 である。

表 10 は作品 55 個を筆者が分類したもので、一応の目安である。表 10 より、年令がいく程作品 b 型が多くなり、混雑 a 型が少なくなっていくのがわかる。アボリジニも年令がいく程我々と似た作品を作る。筆者のねらい通り、混雑 b 型と作品 a 型が各群にみられる。特に 10-11 才群に多

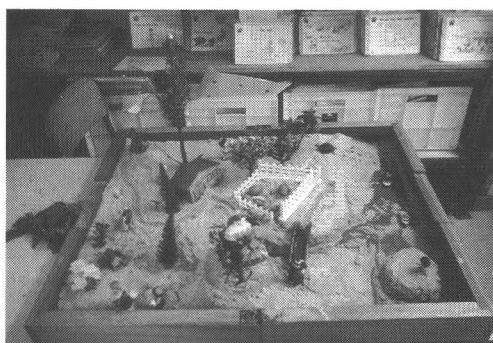


写真 22 14 才男子の作品

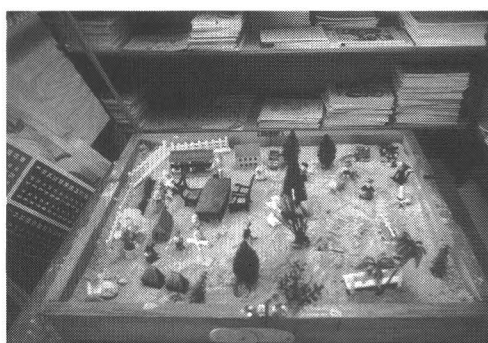


写真 23 14 才女子の作品

表 10 分類型と群との関係 (数字は作品数)

群と性別 類型	5～7 才			8～9 才			10～11 才			12 才以上			合計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
混雑 a 型	2	0	2	0	1	1	0	1	1	0	0	0	4
混雑 b 型	1	2	3	1	1	2	1	1	2	1	0	1	8
羅 列 的	1	0	1	1	0	1	2	1	3	0	0	0	5
作品 a 型	1	0	1	0	2	2	3	2	5	0	1	1	9
作品 b 型	0	1	1	5	0	5	3	6	9	9	5	14	29
合 計	5	3	8	7	4	11	9	11	20	10	6	16	55

いのが目立つ。他の地域の作品をこのように分類していないので、比較できないのは残念である。

〔白人の作品〕

参考までに白人の作品として3つの例を示しておく。写真24は、10才男子の作品で、初発時間は10秒で、所要時間は27分40秒で、一番長かった。玩具の使用数は75個で平均の1.5倍である。戦兵士や軍用車があり、戦いであるが、戦っているわけでもない。羅列的と考えておく。箱の縁に玩具がおかれていることや飛行機が飛んでいるところをも入れて写真をとってほしいというなど、何か箱から出たい気持ちが示されていたのかもしれない。写真25は、8才男子の作品で、初発時間は10秒で、所要時間が18分だった。使用玩具数は19で一番少なく、(一人砂に絵を書いた人はいたが)平均の3分の1ぐらいであった。柵を使い、まとまった作品であり、作品b型といえよう。静かに大仏が2体ある寺院のようであるが、左から荷物車が入ってき、その静けさをこわしている。写真26は9才女子の作品である。写真26は、初発時間が1分50秒で一番長く、所要時間は24分30秒と平均より少し短いぐらいであった。使用玩具は47

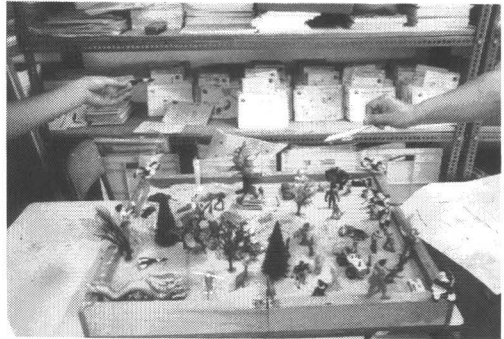


写真24 10才白人男子の作品

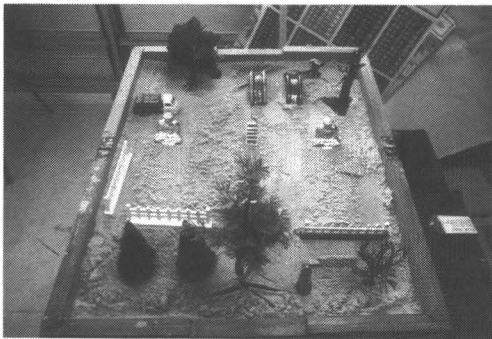


写真25 8才白人男子の作品



写真26 9才白人女子の作品

個で、平均より少し少ない。ピアノが屋外に置かれ、屋内と屋外とがいりまじっている感じがであるが、玩具が整理されているのでまとまった作品b型と考えておく。

2. アウトステーションでの箱庭

筆者が、アウトステーションへ出かけて、箱庭の作品を収集するつもりであったが、時間の都合や、先方の都合などで、それは出来なかった。そこで、箱庭のセットを残しておき、箱庭に関心のある、そこの教師であるマレー・ガードに収集してくれるように依頼した。教示の仕方や記録のことを教えた。

ところで、1991年に岡田が¹⁴⁾、松山によってもたらされた、アウトステーションに住むアボリジニの5個の作品を報告している。それらは一家の作品であって、年令にばらつきがあった。今回はそれらを参考にしながら報告したい。

なお、制作場面のセッティングを示す写真がないのでどのようなセッティングであったかは確かでない。しかし、写真27より、このような場面がセッティングのひとつであったことはうかがえる。なお、写真27は制作中であり、出来上がった時は、手にしているゾウを中央下（電車より手前、写真27は反対側からとられたもので、正位置は向こう側の子どもがいるところである。）に置かれ、ピンクレインジャーやみどりレインジャーも置かれた。玩具が中央ぐらゐまで置かれ、箱の半分は使用されていた。

写真28は2才男子の作品である。砂場で自動車を右手にもって、動かして遊んでおり、作品とはなっていない。作品とはならず、砂箱で遊ぶだけというのは、日本の5才までぐらいの子どもたちにもよくみられることである。写真28に示されるように、5才までぐらいの子が与えられた箱庭セットに反応するのは類似しているということになり、これは興味深い。またこれは、岡田が¹⁴⁾1991年の報告で示した6才男子が箱の中では作品を作っていたが、制作中に、箱の外で自動車を動かして遊んだのと類似しているといえる。

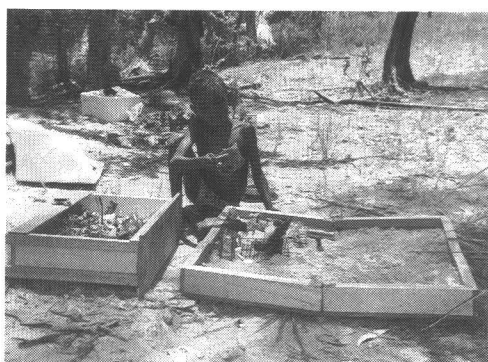


写真27 アウトステーションのセッティング
(6才男子の制作中)



写真28 2才男子の作品
(Kunwinjku 語を話す部族)^(注5)

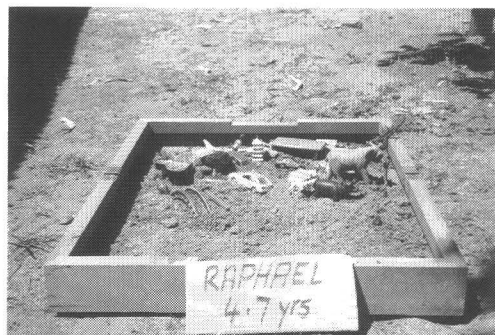


写真29 4才男子の作品
(Kunwinjku 語を話す部族)



写真30 5才男子の作品
(Kunwinjku 語を話す部族)

なお、今回は写真では示さないが、4才の女子が同じように自動車を砂箱の中で動かして遊んだ例があった。

4才児でも作品になったのが、写真29である。この作品では、手前が空白で、上半分が使用されている。自動車やピアノや弦楽器が無造作に置かれている。ゾウやカバや白馬が右方向に進行しているのがひとかたまりとなって、まとまった印象を与える。空白と置かれている位置とを橋わたすように橋が置かれているのも印象的である。雑然としているが、空白部分と置かれた部分が区別されているとも考えられる作品である。単に雑然としているというよりも少し整理されてきたもので、混雑b型といえよう。

5-7才児の作品は、写真30のように箱いっぱいに雑然と玩具が置かれたもの（混雑a型）と、箱の一部分が使用されるだけのもの（玩具は雑然としているがその雑然さは混雑b型）と整理されたもの（作品b型、写真31）に分かれた。今回の5-7才群は3人だけで、余りに少ないが、このばらつきは、日本とも類似しており、また、オーストラリアの作品群とも類似していた。この年令ぐらいまでは同じような発達状態といえるのかもしれない。具体的に示すと、写真30は、5才男子の作品である。これは、箱の中に、玩具が無造作に多数置かれている。人間、動物、植物など5種類のすべてが使われている。この年令のひとつのタイプの作品といえる。

写真31は、7才女子の作品である。玩具は植物だけが使用されている。整理され、手前（正位置が左か、縦に使用されたのか確かでないが、名札が正位置を示すと判断して）は何も置かれていないが、筋がつけられ、道の感じである。手前が空白になることが多いようである。

8-9才群は被験者が男子1人で彼の作品は写真32である。多くの玩具が箱いっぱいに使用され、一見雑然としている。しかし、柵によって、左下、中央下側、左上と少しはまとまりがありそうである。特に、下側は、左隅の木のもとに人が集まっているようであり、中央下側は、カバと竜が対立し、自動車が柵の間から出入しているようである。下側から何かまとまり始めているようである。混雑b型といえよう。この年令になると、日本人は、作品を作り、雑然としたものは皆無（心理的な問題がある時はこのような作品も出てこようが）になる。この年令で日本人と何か相違が出来てくると言えそうである。

10-11才群は男子2名、女子3名の作品がある。写真33のように、少し雑然としているが、町

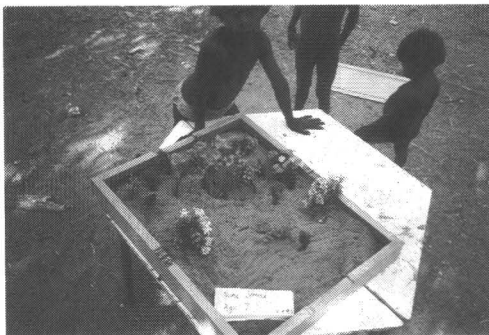


写真31 7才女子の作品
(Kunwinjku 語を話す)

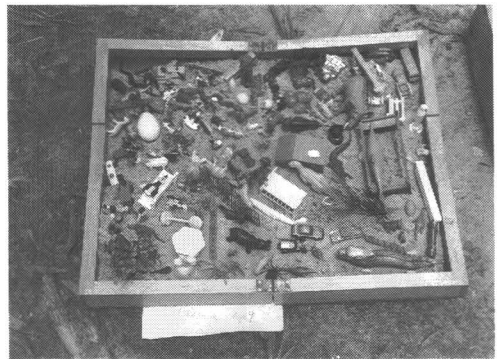


写真32 9才男子の作品
(Burarra 語を話す)

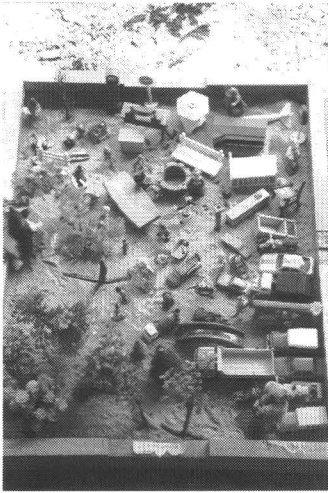


写真 33 11才男子の作品
(kunwinjku 語を話す)



写真 34 10才女子の作品
(Kunwinjku 語を話す)



写真 35 17才男子の作品
(Kunwinjku 語を話す)



写真 36 6才女子の作品
(Burarra 語を話す)

の作品とテーマをつけることができそうな、まとまりをもってくる（作品 a 型）。他にもこれに似た作品を女子が 2 名作っている。また、写真 34 は 10 才女子のまとまりのある整理されたものである。まとまった男子の作品では、家具が置かれ、家と外という作品もあった。具体的にみると写真 33 は、11 才男子の作品である。左上は柵で囲まれ、家のようなものである。右下は駐車場のよう自動車が置かれている。全体として町のようなものである。兵士がいたり、家具が路上にあるなど、場にそぐわないものがあるが、境界があいまいであるが、まとまったものといえよう。作品 a 型に属すると考える。

写真 34 は、10 才女子の作品である。自動車が左上の聖なるところ（どういう玩具か明確でないが、聖なる所と連想した）へ行くようであり、まわりの森では動物（ヘビ、恐竜）がいる。恐竜を猟師が鉄砲でねらっているようだ。玩具が少ないが、花が咲き、豊かな感じを与える。（作品 b 型）

12才以上は、男子5個と女子2個の7作品が得られた。男子は作品にはなっているが、玩具が箱いっぱいに置かれたものである。動物だけとか人間だけが置かれているものもあった。具体例を示すと、写真35は、17才男性の作品で、町として比較的にとまとった印象である。家が建ち並び、自動車が走っている。中央は広場のように人々が集まっている。ゴリラらしきものがいるのは不釣り合いだが、一応作品b型とする。

写真36は、36才女性の作品である。彼女は教師をしており、それなりの教育を受けたことになる。森の中を自動車が走っており、かつ工事中でもあるようだ。花が咲いており、はなやかな感じを与える。(作品b型)

岡田の1991年の作品(12才女子の作品で、写真34や写真36のように箱が縦に使われ、森の中を自動車が走っている作品であった。)と同じように、12才以上になると、それなりの作品になっている。

これまでのことを要約すると、5才ぐらいまでは、箱の中で遊ぶことがみられ、これは子どもの共通した行動のようである。全体に雑然としているが、年齢を経るにしたがい、まとまりある作品になる。

なお、箱が縦に使用されることが多いのに気づき、数えてみると、横8個、縦11個となった。普通箱の縦使用が少ないことから、ひとつ特徴かもしれない。箱庭のセッティングが広場であり、自由に箱のまわりを動きやすかったのかもしれない。

VI. お わ り に

すでに述べたように、子どもたちは、調査に協力的で、制作を楽しんでいたようである。彼らの制作中の動作を観察することで、異性へのはにかみや内向的な性格などを知ることができた。心理テストといった形式ばらない箱庭の方が人類学的な調査に適しているかもしれないと主張したことに合っており、意を強くした。ただ、箱庭の作品だけからの解釈はむづかしく、これからもっと資料を収集する必要がある。

5才ぐらいまでの子どもは日本などと同じように、制作するというより、遊びが主になるようであることの発見は当たり前かもしれないが興味深い。

マニングリダ校での作品を年令によって群分けし、その特徴を指摘した。各群とも人数が少なく、あくまでも今回の資料の分析である。しかし、これを手がかりにして、今後の調査をより密度の高いものにしていけるだろう。

アウトステーションの作品を提示できたのは幸いであった。学校に通う子どもと余り変わらない印象をもった。マリーガードに感謝したい。

注

- 注1) 本調査は、1990年—1992年の文部省科学研究費補助金国際学術研究(代表者国立民族学博物館、松山利夫)の研究のひとつである。ここに記し、松山氏に謝辞を申し上げます。また、民族博物館が組織していた研究班「オーストラリアにおけるアボリジニと白人社会—班長 小山修三」の活動報告のひとつでもある。

- 注2) 小山修三 (Ko), 久保正敏 (Ku), 岡田喜美子 (O), 岡田朋子, 岡田昌子の5名である。
- 注3) マニングリダ学校は, Marilyn Rattogan が校長であり, 教師19名, アシスタント9名, アウトステーション教師8名, アシスタント9名など (他に客員教師4名など) の教員と生徒男子215名, 女子190名 (但し期待される生徒数男子253名, 女子224名とある) よりなる学校であった。
- 注4) アウトステーション: 都市に居住するようになったアボリジニはみずからの健全さをとりもどし, 維持するために, 祖先以来の野外生活を取りもどすのがよいとする運動。この運動に沿って, 保護地区にある村から遠く離れた野外 (森) で生活を送っている場所をもここでは意味した。
- 注5) マレー・ガードはマニングリダ校教員である。当時, アウトステーションへの訪問教育を役割としていた。なお, 彼に依頼したこともあり, 制作者に関する情報は皆無に近い。年令と性別が記され, かつ話している語種が記されてあった。アボリジニの話す言葉は多く, どの言葉を使うかいろいろな意味があると思われる。筆者にはそのような知識はないが, 資料として役立たせるために, 一応どの語を使っていたかを記しておいた。なお, Kunwinjku 語と Burarra 語の2種類であった。

参 考 文 献

- 1) 藤岡喜愛, 1966, 狩猟採集民ワティンディガのパーソナリティー——パーソナリティーの進化序論——, 人文学報 XXIII, 1-66, 京都大学人文科学研究所
- 2) 藤岡喜愛, 1972, 動物のティンディガ語名の資料から一知覚の特性について, 人文学報 XXIV, 69-85, 京都大学人文科学研究所
- 3) 藤岡喜愛, 1974, イメージと人間—精神人類学の視野, NHK ブックス 213, 日本放送出版協会
- 4) 藤岡喜愛, 1988, ミミの姿をめぐる試論—オーストラリアのロックペインティングから—, 衣笠茂編著, 歴史と伝承, 128-151, ミネルヴァ書房
- 5) 藤岡喜愛, 1989, 文化人類学の中のイメージ, 水島恵一他編著, イメージの人間学, 54-74, 誠信書房
- 6) 樋口啓司他, 1990, オーストラリアにおける箱庭表現に関する研究(7)—小学生の箱庭作品について—, 心理臨床学会第9回大会発表論文集, 78-79
- 7) 小山修三編, 1991, オーストラリア・アボリジニ: 狩猟採集民の現在, 国立民族学博物館研究報告別冊 15号
- 8) 窪田幸子, 1993, 多文化主義とアボリジニ, 石川栄吉監修, オセアニア近代に生きる, 99-113, 東京大学出版会
- 9) 窪田幸子, 1994, オーストラリア・アボリジニ女性の労働と経済生活—社会変化の視点から—, 大手前女子大学論集第28号, 155-165
- 10) K. マドック, 松本博之訳, 1986, オーストラリアの原住民, 勁草書房
- 11) 岡田康伸, 窪田幸子, 1988, アボリジニのフィールドワークスタディ——箱庭療法による試み, プシケー7号, 137-150, 思索社
- 12) 岡田康伸, 1984, 箱庭療法の基礎, 誠信書房
- 13) 岡田康伸他, 1988, オーストラリアにおける箱庭表現に関する研究, 箱庭療法学研究1—1, 17-26
- 14) 岡田康伸, 1991, 箱庭表現の諸相, 小山修三編, 国立民族学博物館研究報告別冊, 15号, 379-404
- 15) 岡田康伸, 1994, 箱庭療法の展開, 誠信書房